

313 組織学的効果からみた推測A3胸部食道癌に対するneoadjuvant療法の検討

富山医科薬科大学第2外科

清水哲朗, 坂本 隆, 野本一博, 新保雅弘, 井原祐治, 榊原年宏, 田内克典, 齊藤光和

【目的】推測A3症例に対するneoadjuvant療法の指針決定の目的で検討したので報告する。

【対象】対象は、当科で術前治療後切除し、1年以上を経過した胸部食道癌症例30例。治療法の内訳は、温熱放射線化学療法13例、放射線化学療法13例、化学療法単独4例であった。【結果】組織学的深達度別5生率では、a2以下19.4%、a2およびa3 5.9%と有意差を認めた。リンパ節転移では、n2(+)以下とn3(+)以上の5生率がそれぞれ20.6%、0%と有意差を認めた。a2およびa3の半数以上はn3(+)以上のリンパ節転移を伴っており、neoadjuvant療法として、リンパ節転移の制御が重要と考えられた。治療効果のGrade別にみると、各群間に生存率の差を認めず、術前治療の効果としては、遺残癌細胞の壁外への露出や剥離面の遺残が重要であることが示唆された。治療法別に5生率を検討すると、CDDP+5FUを含めた温熱放射線化学療法群が41.7%と、その他の化療を行った群(0%)に比し良好な傾向が認められた。手術の効果としては、組織学的根治度C0 18例の5生率が0%に対し、C \geq 1 29.2%と後者が有意に良好であった。

314 食道癌術前療法後の局所リンパ球浸潤、多核巨細胞浸潤に関する検討および温熱療法併用の意義

九州大学第2外科

森田 勝, 江頭明典, 荒木貢士, 川口英俊, 佐伯浩司, 大賀丈史, 北村 薫, 桑野博行, 杉町圭蔵

【方法】食道癌術前化学・照射療法を施行した122例の切除標本にて、リンパ球浸潤(LI)、多核巨細胞浸潤(GC)を観察し、I群(LI(-):25例)II群(LI(+))GC(-):77例)、III群(LI(+))かつGC(+):20例)にわけ、これらの細胞浸潤の臨床的意義を検討した。【結果】1) grade 0,1,2症例では5生率II群44%、III群69%に対し、I群では3年生存した症例は認めず有意に予後不良であった(P<0.05)。2) 化学・照射療法(CR)に温熱を併用(HCR)した頻度はI、II、III群各々44,63,78%でIII群はI群より有意に温熱併用の頻度が高かった(P<0.05)。3) CR、HCR施行例のgrade 3の頻度は各々9.8, 29.6%で(P<0.05)、5生率は37, 52%であった(P<0.05)。さらに、HCR施行例におけるI、II、III群の5生率は0, 58, 71%であった。【まとめ】LI,GCは食道癌の化学・照射療法後の予後に関与し、癌細胞が生残した症例では特に重要と考えられた。さらに、化学・照射療法に温熱療法を併用することにより、LI,GCが顕著になり、予後は向上がする可能性が示唆された。

315 食道癌に対するLow dose CDDP+5Fu化学・放射線(CF-R)療法の適応

国立病院九州がんセンター消化器部外科
城間伸雄, 斎藤貴生, 中島秀彰, 鴻江俊治,
馬場秀夫, 武富紹信, 瀬尾洋介, 友田博次

食道癌に対するCF-R療法の適応について生体防御機構の面から検討した。

【方法】食道癌41例を対象とした。CF-R療法はCDDP 6mg/m², 5Fu 250mg/m²,放射線1.6Gy、連日(週5日)計19回を1クールとし、手術例には術前後に1クールずつ、非手術例には2クールを施行した。

【結果】切除10例、非切除31例のうち非完遂例は後者のみ7例みられた。また、切除例のうち3例に術後重症感染症が発生した。非完遂例には高度進行癌が多く、治療前における栄養指標、IgAの低下、 α 1-antitrypsin, CRP, 血清IL-6の上昇がみられた。他方、術後重症感染症発生例には血清IL-6の上昇を認めた。

【結語】血清CRP、IL-6が上昇し、低栄養を有する高度食道進行癌例はCF-R療法が非完遂になりやすく、また、血清IL-6が上昇した例は術後重症感染症を発生しやすいことから、このような症例にはCF-R療法の適応を慎重にすべきと思われる。

316 T1食道癌に対する化学療法の意義 熊本大学第一外科 吉岡正一, 田平洋一, 近藤圭一郎, 森 毅, 田中 誠, 中野敢友, 平岡武久, 北村信夫

【目的】T1食道癌に対し、合併療法の必要性を論じた報告は少ない。そこで、ly、v、n因子から化学療法の必要性を検討した。【方法】1984年から1995年までの胸部食道癌切除230症例のうち、術死・他癌死を除く60例のpT1症例を対象とした。術前検査・術後組織診断でly、v、nのいずれかを認めた症例に化学療法を施行し、その成績を検討した。【結果】60例中18例がpT1a、42例がpT1bであった。T1a群の5年生存率は87.4%で、T1b群の57.7%に比べ、有意に高かった。33例(55.0%)にly、v、nのいずれかを認めた。3因子がいずれか陽性の32例に化学療法を行い、5年生存率は56.2%であった。【結論】T1食道癌60例のうち、33例(55.0%)に、組織学的に、リンパ管侵襲、血管侵襲、リンパ節転移のいずれかを認めた。これらの症例に化学療法を追加することにより、これまでの報告より良好な予後が得られた。しかしながら、尿管侵襲のない群に比べると成績不良であり、合併療法の改良が必要と考えられた。